

地上デジタル普及推進 ミニドラマ

やさしい嘘

いちごとせんべい 第二話

(現状 11分)

脚本 大岡俊彦

登場人物

綾子 (27) 煎餅や「ささき」の女房。
祐一 (27) 煎餅や「ささき」の主人。

源治郎 (62) 綾子の父。田舎から上京。
小松政夫のようなひょうきんさ。

女子中学生 (15) 前回より出演。
綾子の母 電話の声のみ。
ラジオのアナウンサー 声のみ。

○せんべいを焼く祐一

○煎餅や「ささき」店先

祐一「ふーっ」

汗をぬぐいながら奥から出てくる。

綾子「おつかれさま。乾燥待ち？」

祐一「温度設定が難しい。そろそろ新しい
焼き釜が欲しいね」

祐一、ポケットからタバコを出す
が、空き箱。

と、奥の電話が鳴る。綾子とりにいく。

祐一、レジから千円拝借して…。

○「ささき」内、焼き釜の前

タバコを吸おうとすると、綾子が怒っ
て入ってくる。

綾子「祐ちゃん、どういうこと！ レジが

また千円勘定合わないんだけど！」

祐一「…タバコ切れたんだよ」

綾子「店のお金からとらないですよ！」

祐一「いいじゃんタバコくらい。細かいこ
とやなよ」

綾子「細かくたって細かなくなかったって店の

お金は店のお金！」

祐一「(カチンとくる) 俺が焼いた煎餅の

代金だぞ？」

綾子「(カチンとくる) 私が売ってるんで
す！」

祐一「ウチの金なんだからいいだろう？」

綾子「あなたのお金じゃない、二人のお金
なの！ 新しい焼き釜買うんでしょ？」

祐一のタバコを取り上げようとして揉
み合う。その拍子に、トレイごと煎餅
が落ちてしまう。

大量に割れた煎餅。

祐一「…なにすんだよ！」

綾子「…なによ！」

ひよっこりと首を出す源治郎。

源治郎「あのー。：もしもし」
にらみ合う祐一と綾子。

源治郎「C Q C Q。：お客さんだよ」

綾子「あ：」

○煎餅や「ささき」店先

女子中学生が煎餅を買いに。

綾子、源治郎「ありがとうございました」

一緒に頭を下げる。

女子中学生「：新しい人ですか？」

綾子「？：（あまりにも自然に隣にいた

源治郎に驚いて）お父さん！！」

源治郎「（いたずらっぽく微笑む）」

○割れた煎餅に、タイトル『やさしい嘘』

○夜、食卓

晩ご飯のあとのお茶タイム。

綾子「まったく、来るなら来るで電話くらいしてよね」

源治郎「したよ、ほれ。同窓会より」

綾子、源治郎「一日前に来るから泊めて」

綾子「：あ。今朝の電話」

煎餅を出す祐一。

祐一「ウチのですが、どうぞ」

源治郎「？」

出された煎餅は全部割れもの。

祐一「どうしてもいくつかは割れちゃうんですよ。お客さんには出せない欠品だけど、味は同じなんです」

源治郎「（次々と食べて）ウマイね。これもウマイ。色々味、どれも天才。ウチの婿ど

のは天才じゃないか綾子」

綾子「天才は言い過ぎでしょ」

源治郎「そんな立派な人と喧嘩しちゃいか

んよ」

綾子、祐一「：」

空気が凍ったのを察知し、テレビをつ

ける源治郎。

スカイツリーの建設中ニュース。

源治郎「キター！キター！ やっぱ東京はこれだな！ 見よ輝くデジタル波！ ネット連動も流石デジタル波！」

データボタンから情報を次々に引き出していく源治郎。

祐一「？」

綾子「あの、ウチの父、アマチュア無線マニアなので」

祐一「あ、最初、CQCQって」

源治郎「祐一くん、キミは流石見所がある」

綾子「：そう？」

○寝室、夜

枕元のラジオを聞き、天気図を年季の入ったノートに書いている源治郎。

源治郎「：死ぬ前に、行きたい所があるんだ」

綾子「え？」

源治郎「なんでもない。おやすみ」

電気を消す源治郎。

○寝室、翌朝

綾子が目を覚ますと、源治郎の布団だけたたまれてある。

○食卓、朝

綾子「お父さん見なかった？」

首を振る祐一。と、綾子のケータイが鳴る。

綾子「もしもしお母さん？ …そう、お父さん来た。でも…え？」

電話の母の声「検査の結果聞きたくないからって、逃げたのよ」

綾子「検査って、…なんの？」

電話の母の声「：癌」

綾子「(祐一に)…探してくる」

祐 一「俺もいくよ」

綾 子「祐ちゃんは店にいて。お店は毎日開けなくちゃ」

祐 一「でも」

綾 子「あなたは店を守ってて！」

飛び出す綾子。

○秋葉原、アマチュア無線の専門店

綾 子「お父さん！」

変な形のアンテナを物色していた源治郎。

綾 子「母さんから電話があつたの」

源治郎「：綾子、今日一日デートしてよ」

○浅草、隅田川などを歩く綾子と源治郎

源治郎ははしゃいでいる。

綾子はうまく切り出せない。

○建設中のスカイツリー、夜

ケータイで話す綾子。

綾 子「うん。大丈夫。今スカイツリーの下」

スカイツリーを見上げる二人。

源治郎「こいつもライトアップするんだろう

ねえ東京タワーみたいに」

綾 子「お父さん、あのね」

源治郎「東京タワーが出来た時は、ほんと時代がはじまる感じでワクワクした。みんな成長するんだって思ってた。スカイツリーもそういう象徴になる日が来るね。それは、君ら若い奴らがしていくんだよ。小さい力が集まって、時代は出来ていくんだ」

綾 子「：」

源治郎「デジタル波は何か知ってるかい？ 東京タワーから出ているアナログ波は、実は太い。今とびかう電波は交通渋滞を起こしてるんだ。デジタル波はスリムになる分、他に余裕が出る。君のケータイや

わしのアマチュア無線がより便利になる可能性が出てくるんだ。：祐一くんとは、うまくやっていけそうかい？」

綾 子「：どこから喧嘩見たの？」

源治郎「最初から」

綾 子「じゃわかるでしょ。私も祐ちゃんも、煎餅やをちやんとやっていきたいからこそ」

源治郎「：検査の結果は大丈夫だってさ」

綾 子「え」

源治郎「癌だったのは嘘。嘘ついてお前達を見にきたんだ」

綾 子「え、何、それじゃ私が心配したのは」

源治郎「それでもしなきゃ、さつきみたいな本音聞かせてくれんじやろ」

そこへ、祐一が煎餅を持ってくる。

祐 一「新作、出来ましたよ」

割れた煎餅の詰め合わせ。

祐 一「味の組み合わせは工夫したけど、ほとんどはお義父さんの言葉がヒントですよ」

綾 子「名前は？」

祐 一「割れたぐらいじゃびくともしないって意味で、『仲直り』なんてどうかと」

綾子、思わず微笑んでしまう。

綾 子「これからはこづかい制にします」

源治郎「スカイツリーだけに、二人はまだまだ建設中ってことで」

綾 子「誰がうまいこと言えと」

○翌朝、店先

煎餅の手土産をたくさん持たされた源治郎が去ってゆく。

綾 子「あの電波親父何しに来たんだか」

祐 一「デンパって、それひどくね？」

綾 子「また来年の7月24日に来るってさ」

祐 一「？」

綾 子「今度は役目を終えた東京タワーの下でお祭りするんですって」

祐 一「あそっか。流石電波親父」
綾 子「デンパって、それひどくね？」
笑う二人。お客さんが来る。

タイトル『新しい時代は、小さい力から。
2011年7月24日、NHKはデジ
タル放送へ移行します』